浦歌無子

6 月の作品にもさまざまに心動かされました。
そのなかには、いろいろな側面を持つ「時間」の姿に惹かれる詩が多くありました。

赦す日が来るまで雨を飲む蕾　　笹生あい

赦したときに、花は開くのでしょうか。蕾はうちがわに時間と雨を抱えているのですね。「赦す日が来る」という祈り、「雨」と「蕾」が美しく響きあっています。

古本から落ちた栞
何時か何処かで
小さな手が
切り貼りした
画用紙とセロファン　　春町　美月

本に書かれ言葉によってとどめられた時間のあいだに挟み込まれていたひとつの時間。見ず知らずの誰かの費やした時間を想像するということ。小さな手つきへのまなざしがあたたかい。

ざっさざっさと
落ち葉を踏む子
ざっさざっさと
戦争にいく　　うすしか

「ざっさざっさ」というオノマトペが「落ち葉を踏む」ときと「戦争にいく」ときとでは、全く違うものとして響いてきます。しかしながら、「戦争」という非日常は唐突のようで、実は日常の歩みの延長線上にあるのでしょう。

簡単に壊れて戻らぬものがいい
水羊羹をかかげて握る　　西春奈

時間は後戻りできないので、世の中には「壊れて戻らぬもの」であふれていますが、「がいい」と言い切る潔さ。言い切って、さらに「かかげて握る」ことで、自分を奮い立たせているのかもしれません。それにしても「水羊羹」。展開がユニークで魅力的です。

遅かった手紙がついて
銀色のポストの底の泥をさらう　　真島

「銀色のポスト」は作者の内奥でもあるのですね。「遅かった」からこそ積もった「泥」ですが、待ちに待った手紙の到来に泥がさらわれたあとには、積もる前よりも銀色は輝きを増すのでしょう。

あめんぼが事故の水たまりを滑る　　細村　星一郎

不在のものの気配を強く感じます。また、この「事故」は人間界におけるなんらかの事故と読んだのですが、同じ空間にいながら、交渉のない世界が同時に存在しているという世界のなりたちを急に不思議に感じました。

あの頃から名前を
呼ばれた気がした
納豆にカラシを足したところで　　青野　椰栄

日常のふとした瞬間にとつぜん甦る過去の記憶のことが書かれているのだと思うのですが、「あの頃から名前を／呼ばれた気がした」という表現が新鮮で魅力的です。

湿地で
ひどく痒い目を掻ききったら
まぶしい　夜だった　　郡司和斗

掻くというのは自分を傷つけつつ、気持ちよさも伴うどこか身体の不思議を感じる行為で、重たく湿った空気のなか目を閉じて一心に「掻ききっ」るという徹底のあとに目を開けたら、掻く前とは違う時間軸の世界にワープしてしまったかのような。「まぶしい」と「夜」のあいだの一字空けも効いています。

時計の針が六度進む
東はいいねが十増えて
西は十の命が消えていく　　桜咲

容赦のない時間。「いいね」の対に置かれているのが「命が消えていく」ことであることに胸を衝かれます。

黒い犬のいた場所に
トマトが植えられるまでの
二年半　　春町　美月

「二年半」が経ち、ようやく気持ちが一歩前へ進んだことがしんみりと伝わってきます。

解けて落ちて信号はまだ青で
なのに
もう取りに行かないのね
わたしは　　春町　美月

微妙な意識の流れがうまく表現されていると思います。生きていると、このようなやわらかい諦めのような決別がさまざまにあって。積極的に手放したわけではないけれど、自分の人生をすりぬけていったものや人がたくさんあることに思いが及びました。

八月の乳母車には誰もいない　　亀山こうき

否定形の締めくくりが鋭く響きます。
八月という季節の取り合わせによって、いたましい空白がより強く伝わってきました。